

南信子の保育思想の形成（1） －ランバス女学院における保育－

The Formation of Minami Nobuko's Thought on Early Childhood Education and Care (I)

－ Practices at Mary Lambuth Girls' School －

熊 田 凡 子*

要旨

本稿は、北陸学院保育短期大学（当時）の創設（1950年）に携わった「南信子」（みなみのぶこ、1914～2003）の保育思想の形成過程を南の戦前期の足跡とともに明らかにしていく試みである。一人ひとりの子どもの人格を尊重し、子どもの自発的で文化的・創造的な遊びを重視した南の保育のあり方は、戦前の学びが起点となり連続していくものである。フレーベル主義教育の土台の上に、進歩主義教育に基づく自由な保育形態が導入され、それが南信子の保育の根幹にあった。

キーワード： 保育思想の起点(Starting Point of Thought on Early Childhood Education and Care)／
会話(Conversation)／礼拝(Worship Service)

I. はじめに

南信子とは、北陸学院保育短期大学（現：北陸学院大学）の創設に関わり、戦後の日本のキリスト教保育、幼児教育の指導者として知られている。筆者は、その北陸学院短期大学保育科の卒業生であるが、筆者が入学した当時（1991年）、南信子は保育科長の任務を終え非常勤講師であった。また、筆者は、キリスト教主義幼稚園において保育実践の経験はあるが、南信子から直接保育に対する指導や助言を受けたという交わりはない。

しかし、筆者が北陸学院短期大学で学んだ保育内容・方法を含む保育全般は、その北陸学院保育短期大学の創設から語られてきた南信子の保育理論および実践論が継承されたものであり、筆者がキリスト教主義幼稚園において培った保育技術等においても、南信子の保育思想が基盤にあると考える。それらのことは、筆者自身がキリスト教主義幼稚園における保育の中で、南信子から直接かわり保育を学んだ経験をもつ幼稚園教師の保育

実践に着目を置き、その保育指導や助言の実際には、南信子の幼児観や保育観が印象付けてられていることからいえる。その継承されてきた南信子の保育は、尊い保育方法および内容として受け取られてきたと実践的立場にある筆者自身の視点からもうかがえる。

これは、筆者の私見であるが、南信子から指導され受け継がれてきた保育は、キリスト教主義幼稚園の保育に焦点を当てたものではなく、保育という業そのものが価値の高いものであり、人格形成の基盤を培う幼児期の重要な教育であることを意味すると考える。また、キリスト教主義幼稚園における保育をキリスト教保育と称しているが、その内容は、宗教教育という形式を表しているのではないと考える。このような筆者の保育の捉え方を明らかにする上で、南信子の保育思想形成過程を探究することには意義があると考えた。

II. 南信子の戦前の歩み－「南文庫」より

本稿は、近代日本のキリスト教主義幼稚園における保育実践に関する歴史研究¹の手がかりとして、南信子の戦前の歩みを通して、南の保育思想の形成過程の考察を行う。南信子の特徴ともいえ

* KUMATA, Namiko
北陸学院大学 人間総合学部 幼児児童教育学科
保育内容・言葉

る保育方法は、「自由遊び」を基底にし、礼拝を中心とする「生活」、そして「文化的・創造的活動」の構造化および統合を目指したものであり、それを「三層構造論」と称している²。これは、南信子の歩みと共になされた保育思想の形成によるものであると筆者は注目する。南信子は保育実践の経験を持つ理論家であるため、南のいかなる保育のあり方が理論へ至ったのか、その背後にあるものまで踏み込んだ検討をするべきである。

その南信子の保育思想の形成の起点と考えられるのは、ランバス女学院において学んだ保育との出会いであろう。そこにおける保育実践の学びを明らかにすることによって、南の保育内容、方法の起源を見出したい。本稿では、キリスト教主義幼稚園に限らず、今日の保育実践のあり方を根本に立ち返ることとしたい。

また、南信子のランバス女学院時代については、「南文庫」にある自身の史料を用いて明記し、南の保育思想の起点を考究する。「南文庫」とは、北陸学院に寄贈された南信子の蔵書、資料等の総称であり、現在、北陸学院ウィン館に所蔵されている³。本稿では、「南文庫」にある南と関連性のある年史『聖和八十年史』『聖和保育史』などを用いて南信子が学んだランバス女学院における保育を概観し、「卒業記念帖」類の『ランバス女学院幼稚園 昭和13年度修了記念帖』の中身を分析し、南が学んだ保育内容を具体的に検討する。本記念帖は、ランバス幼稚園の卒業記念帖であり、幼稚園保姆に立花富の名前がある。立花富は、南信子に最も影響を与え、数年後に聖和幼稚園で共に働くことになる恩師である。幼稚園の日課や当時の遊びの内容、また会話が記録されていることには着目できる。本記念帖より南信子がランバス女学院時代(1937(昭和12)年4月～1940(昭和15)年3月)に立花富を中心とした教師から学んだ保育内容を見出したい。

Ⅲ. ランバス女学院における保育

1. 「ランバス幼稚園」の保育の歩み

(1). 保育内容－「自然」「生活」「恩物使用」

1921年(大正10)年4月に広島女学校保姆師範科とランバス記念伝道女学校が合併して大阪に移転し、ランバス女学院保育専修部としての歩みが

始まった。また、保育専修部の開学と共に実習園(付属幼稚園)として、同年6月よりランバス幼稚園は始まり、正式には10月に許可を得て誕生している。幼稚園規則によると、保育内容は、遊戯、唱歌、音楽、児童劇(律動運動、^{はなし}譚、会話)、自然に関する談話、手技、であった(ランバス幼稚園規則)⁴。当時の保育課程は次のようになる。

◇保育時間(デイリープログラム)

- 8:30-9:00 ピアノで名前を呼ぶ、先生からの挨拶、お話
- 9:00-9:45 礼拝、全員への挨拶、カレンダーのマーク付け、会話、スキップ、マーチ、リズム
- 9:45-10:30 グループに分かれる、恩物使用
- 10:30-11:00 戸外遊び、ゲーム
- 11:00-11:30 屋内でのゲーム
- 11:30-12:00 グループに分かれる、恩物使用
- 12:00-13:00 昼食、降園準備、お片付け、さよなら⁵。

開園当時(1921(大正10)年)は、上記の保育計画に基づき、時間帯を区切って保育内容が設定されていた。遊びの内容、特に教材については、「フレイベルの恩物・特に球と積木(平たく細かい教材はほとんど使わない)、フレイベルの砂、粘土、折り紙、裁縫道具、絵画道具、自然物、選び抜かれた玩具、物語、絵、歌、ゲーム、運動、外遊び、自由遊び(先生の管理のもとに)⁶」が中心であって、教師が主導的に進めていくという保育展開であった。また、当時の年間保育案の月目標は、次の内容であった。

- 4月-園での習慣を身につけさせる。戸外の自然に興味をもつ。イースター
- 5月-社会生活に関心を向ける。家庭物語、お百姓の話。買物ごっこ
- 6月-人間(家庭と社会)生活と自然生活における仕事の分担について
- 7月-今までの総復習。
- 9月-外遊びを多くする。人間生活に関連した自然界の変化の意味について教える。
- 10月-食物、衣類に関しての家庭での変化、農作物の変化。天皇誕生日
- 11月-冬支度。食物、衣類、動物、植物によ

る冬支度。感謝祭

12月－神からの最善の贈物。クリスマス

1月－冬の不思議。霜、雪、氷、太陽、雨、
風との関係

2月－自然界と人間生活における相互扶助。
紀元節

3月－1年間のまとめ。戸外活動を奨励。
春の到来。ひな祭り。年長児の卒園⁷

この保育内容から、ランバス幼稚園の開園当時は、自然に関わる活動や子どもの生活に密着しているものが中心であった。その中で、恩物使用が継続されていたのは、ランバス女学院の歴史的背景、広島時代⁸から受け継いだ本質的理解がなされた上でのフレーベル主義教育⁹中心の保育にあったといえよう。しかし、初代園長M. クック (Margaret M. Cook)¹⁰は、このような保育を絶えず問いかけ、子どもに対しての最善の保育を目指し模索して実現の道へと切り開いていくのである。M. クックは、ランバス幼稚園の保育をいかに構築したかったのか。ランバス幼稚園の保育方法の展開によって、明らかになってくる。

(2)．保育展開－「自由保育」の導入

開園当初、自然への関与と生活に根ざした保育を中心とし、恩物使用を継続してきた中で、保育方法が展開されていくのである。『聖和幼稚園100年史』では、ランバス幼稚園の保育についてのM. クックの意向が次のように記されている。

先ず冒頭に「私がきたのは羊に生命を得させ、かつ生命を豊かにならしめるためである」という聖句(ヨハネによる福音書10・10)が掲げられ、「子どもらと共に生きる」ことが目的である、とキリスト教保育を行う幼稚園の姿勢と教師の心構えを強調する。そして保育は「『遊び』による方法」によるのだと。すなわち、神が子どもに与えられた生来の本能である遊び(身体的活動、精神的活動)を用いて、子どもの興味、知識欲、活動欲を刺激して、幼稚園の日々の活動を進めるものとする、と述べている。

これは、開園後1923(大正12)年にM. クックが保育案として書いたものの中の一文であるが、

M. クックはランバス幼稚園の保育における希望と意欲に満ちていたとかがえる。M. クックの保育は、「遊び」が中心であり、その「遊び」によって子どもの興味、意欲が刺激され成長へと結びつくことである。出来るだけ子どもの自由な自発的活動を重んじた保育を目指していたといえよう。クックは、早くから自由製作を導入して自由保育の体系を確立することと、子どもらと共に生き成長する教師像を思い描いていたのであろう。

1926(大正15)年、日本の幼稚園界においては、最初の勅令である幼稚園令が制定され、全国的に幼児教育に対する社会的関心が高まり、幼稚園は、量的にも内容的にも著しい発展が期待され、従来以上にその普及が促進されていった。幼稚園令では、その目的が明確にされ、「幼稚園ハ幼児ヲ保育シテ其ノ心身ヲ健全ニ発達セシメ善良ナル性情ヲ涵養シ家庭教育ヲ補フヲ以テ目的トス」とされた¹¹。従来、「善良ナル習慣」とされていたものが「善良ナル性情」を涵養することに改められ、より広く人間性の基礎を培うことが望まれるものとなった。これは、ランバス幼稚園における保育内容が新しく進展していく契機となったといえよう。

1928(昭和3)年になり、ランバス幼稚園において、保育に関する人材と組織、また施設設備が整い、自由作業を中心とした自由保育の保育形態が導入された。M. クックは、主任保姆であった立花富を呼び、自由作業を取り入れた保育である進歩主義教育¹²をピーヴィ(Arne Peavey)、フィールド(Ruth Field)の両教師から学ばせ、保育に導入した。

『聖和幼稚園100年史』－立花富の述懐によれば、「ただ悲しいことに、アメリカの方ですから、具体的なことは、いろいろと言うが、理論だてて説明することがなかった。後でデューイを読んでみて、初めて、ああなるほど先生の言っていたことを理論づけすればこうゆう事なんだと言うことが分かった。あくまで子どもが中心で、教師はよく子どもを観察して、子どもの求めるものから教育すると言うやり方で、今までのように教師が立てた計画で進めるのではない。この新しいやり方で始めると以前と比べて、子どもが生き生きしました。見ていて面白いんです。苦労はしましたが、形式的に保育するのではなくて、子どもから、絶

えず刺激があるでしょう。子どもから教えられるわけです。それがこちらにはとても楽しい作業でしたね¹³⁾

この述懐から、立花富は、自由作業すなわち自由遊びの実際そのものを保育として身体全体で学び得たのではなかろうかと考えられる。立花富は、幼稚園の教師をすると共にランバス女学院専攻科において幼児教育を教授した人でもある。立花が教えたのは理論づけた保育実践方法ではなかろうかと考えることもできる。立花富は、南信子と同じくして保育実践と保育理論の研究者としての両面を持っていたであろう。進歩主義教育の実践者である立花富から保育の実践を学び、すべてを吸収したかった立花富の保育を、南信子は、いかにして捉えたであろうか。

自由保育の導入は、M. クックの念願であり、これがランバス幼稚園における進歩主義教育の実践の始まりであった。クックが米国コロンビア大学のティチャーズ・カレッジ幼稚園教育部門でパティ・S. ヒル (Patty.Smith.Hill)¹⁴⁾から学んだデュエイの進歩主義教育が実現したのである。このコロンビア大学のティチャーズ・カレッジでヒルから学んだランバス女学院の教師には、クックの他にもフィールドやピーヴィ、そして高森フジらもいたということは、大きな支えであったといえよう。特に高森フジは、ヒルの“A CONDUCT CURRICULUM FOR THE KINDERGARTEN AND THE FIRST GRADE”を「幼稚園及び小学校低学年の行為過程」と訳して、ランバス女学院から1936年に刊行した¹⁵⁾。

このような経緯でランバス幼稚園は、宣教師や保育研究者たちによって米国の幼児教育課程が導入されていったのである。南信子がランバス女学院に入学して幼児教育を学び始めた時にはすでに、進歩主義教育が実践されているだけでなく、保育課程として理論の学びがあったことは『聖和保育史』でみる当時の教師の姿から確かといえよう。

進歩主義教育の導入により、ランバス幼稚園の保育内容においては、「社会見学」が加わり、自分たちの住んでいる社会について知識を養うことが目標におかれたとされる¹⁶⁾。生活に根づいた保育内容によって、子どもの生活を主体とした保育の展開であったと考えられる。進歩主義教育導入

後の保育プログラムは次のようになった。

◇保育時間

(自由保育導入後のデイリープログラム)

9:00 登園、視診、持物を片づける、自由作業、自由遊び

10:00片づけ、おやつ、休息、礼拝(ある時期からは最後に礼拝をした)、グループ活動(お話、リズム、等)、外遊、(礼拝-1日の反省や話など、締めくくりの時間に礼拝をした)

12:00 降園¹⁷⁾

自由保育が取り入れられる以前の保育との比較では、時間割による活動が決まられていない、遊びには子どもが中心にあり教師の計画通り進めるという形式がない、ということが明らかになってくる。教師が教えるのではなく、教師には子どもの内なるもの、子ども自身の考え、潜在的な能力を発見し、それを伸ばすことに必要な援助ができることが必要であったと考える。その手段として自由作業、自由遊びが重要であった。保育計画は、教師のものではなく、子どもたち一人ひとりの成長発達に応じて展開できるものが求められたと考える。そのためには、一人ひとりの子どもの観察も重要であったといえよう。

2. ランバス幼稚園の特徴

ランバス幼稚園は、進歩主義教育の導入によって幼児にとっては充実した楽しい豊かな教育の場として、またランバス女学院の学生にとっては、深い理論の実践の場であり観察・研究を通して真に幼児教育を学ぶ場として、大切な場所であった。ランバス幼稚園には、その他いくつか特徴が見られるため、南の戦前から戦後における保育の連続性を視座に置きながら、探究を試みる。

(1). ナースリー・スクール

ランバス幼稚園におけるナースリー・スクールは、1931(昭和6)年より開設され1941(昭和16)年の大阪から西宮の現在地に移動するまで続いた¹⁸⁾。この指導にあたったピーヴィは、コロンビア大学において、ナースリー・スクールの専門的研究を行い、日本でも早くに3歳児の保育を始めたとされている。単なる託児施設としてではなく、人間形成の上で最も重要な2・3歳児の教育を医学的・心理学的・教育学的な視点から子ども

を中心に少人数の保育が行われていたのである。戦前の日本において、欧米のナースリー・スクールを日本で実現しようと主に米国婦人宣教師の指導によっていくつか設立されていたが、その中には、貧しい地域において福祉的側面を意図としたものと、保姆養成学校や研究所などに付設された教育的側面から子どもの発達や幼児研究を意図として設立されたものがあった。いずれにおいても貧富や階級の差を越えすべての子どもを対象に望ましい保育環境を与えることが目的であったとされる。その中で、ランバス幼稚園のナースリー・スクールは、教育的視点における3歳児の保育を始めたと考えられる。ナースリー・スクールの多くは、戦後の教育制度改革によって保育所へと改称されるか、廃止されていったが、現在にいたっては、3歳児保育の原型でもあったということが考えられるであろう。戦前、日本に設立されたナースリー・スクールは次のようになる¹⁹。

表1. 戦前の日本におけるナースリー・スクール

福祉施設としてのナースリー・スクール

名称(創立当時)	所在地	創立年月日	開設時園長
静岡ホームナースリー・スクール	静岡市井宮町	昭和4年(明治40年より託児所として創立)	ミス・レーマン(トロント大学卒)
クロック幼稚園ナースリー・スクール	熊本 神水	昭和4年5月	ミス・エネ・パウラス(コロンビア大学卒)
愛恵学園ナースリー・スクール	東京 足立区	昭和6年2月	ミス・ペイン(ボストン大学卒)
大阪朝日新聞社会事業団公衆衛生訪問婦協保育学校	大阪 北区	昭和5年7月	保良せき(元厚生省看護課長)
愛清館ナースリー・スクール	東京 亀井戸	昭和10年	ミス・アレン(トロント大学卒)
菊川幼稚園ナースリー・スクール	東京 黒田区	昭和10年	ミス・エネ・パウラス(コロンビア大学卒)

教育施設としてのナースリー・スクール

名称(創立当時)	所在地	創立年月日	開設時園長
ランバス幼稚園ナースリー・スクール	大阪市天王寺区	昭和6年4月	ミス・ビーヴィ(コロンビア大学卒)
児童研究所附属ナースリー・スクール	東京杉並区	昭和2~13年頃	三隅一成(米国でナースリー・スクールの研究)
復活ナースリー・スクール	京都市北区	昭和14年4月1日	ゼー・ケー・モリス

備考：編『日本キリスト教保育百年史』表3-12日本におけるナースリー・スクールより抜粋して作成した。

これらの他にナースリー・スクールは幾つかあったとされるが、当時のナースリー・スクールが、乳幼児の身体的精神的発達を重要視し、教育的、

あるいは福祉的施設として運営されていたことは興味深い。ここでなされた乳幼児の発達の専門的研究が、保育環境や保育内容の質的向上へと結びついていったと筆者は考える。

また戦後も、聖和幼稚園(ランバス幼稚園が西宮に移転した後の幼稚園)をはじめ、いくつかのナースリー・スクールが運営されたが、中でも、北陸学院短期大学に付設されたナースリー・スクール(1954~1979年)は、米国スミス大学でナースリー・スクールの講座を担当していたロエナ・ハドソン・ウィンが創立した本格的なものであったと知られている。戦後における南信子の保育の素地となったことを考究することは今後の課題といえよう。

ランバス幼稚園のナースリー・スクールは教育的施設として、子どもの健康と習慣や性質などに留意した幼稚園と母親と子どもが一体となり学び研究を重ね、子どもの人格の土台を形成することに努めていた。ランバス幼稚園のナースリー・スクールの目的は、第一に一人ひとりの子どもの全人的円満発達をはかることと、第二に父母教育の重要性にあるとして行われた。ランバス幼稚園のナースリー・スクールは、現在の3歳児保育の原型のみならず、保育における育児支援として発展したものであったといえよう。内容は次のようであった。

◇ランバス幼稚園ナースリー・スクールの一日のプログラム

9:00-9:30 登園、視診

9:30-10:00 片づけ、集会、会話、礼拝

10:00-10:30 手洗、おやつ(牛乳、ビスケット等は幼稚園と同じ)

10:30-11:00 歌、リズム、レコードを聞いたりして折りたたみベットで休息

11:10-12:00 庭の遊び、帰宅準備、帰宅²⁰

南信子には、ナースリー・スクールの教師としての経験はないが、ランバス女学院保育科の学生時代に実習体験があった。当時のナースリー・スクールの昼食は週二回行われ、その内一回は保育科生が実習として、他一回は母の会員が幼児食の学びとして実習していたのである。発達に即した3歳児の保育は、ランバス幼稚園の進歩的な教育

活動であったといえよう。

(2) 教師会

ランバス幼稚園においては、毎週木曜日の午後
に附属幼稚園及び関係幼稚園（ナースリー・ス
クールも含む）の教師たちによる教師会が開かれて
いた²¹。ここでは、カリキュラムや保育内容、子
どもの発達や問題について討議をする研究活動
を行っていた。保育内容や保育計画についての協
議、相談が交わされた教師会は、教師たちの成
長の場であり、子ども理解に対する連帯が育ま
れる話し合いの場となっていたであろう。

南信子は、戦後、北陸学院においては、幼
稚園での教師会を重要視し、教師の大切な学
びの場としてきたことが、執筆論文によって
明らかとされている。キリスト教保育連盟発
刊の月刊誌『キリスト教保育』においては、
南信子が「教師会」という論題頁に毎月掲
載した期間がある。1969（昭和44）年10
月から1972（昭和47）年3月までは、保
育原理や保育内容論や保育方法論に関する
論文を、1978（昭和53）年4月から1979
（昭和54）年3月までは、カリキュラムに
関する論文が連載され、南信子が当時の教
師会において課題に挙げた内容をまとめた
ものであると筆者は考えている。これらのこ
とは、ランバス幼稚園における教師会に
その源流をみることができる。

(3) 母親教育

進歩主義が導入された当初、自由保育に
対しては、子どもを自由にさせることは教
育をしないことであるという親の立場から
反論の声も聞かれたと思われる。しかし、
そうした批判に惑わされることなく、自由
保育の現実の中での子どもたちの成長は
驚異的であって、教師たちには子どもの力
のすばらしさにみずから教えられるとい
う結果が生じたのである²²。

こうした幼児教育に至るまで、子ども
の性格、個性、個人差などの発見が教師
の重要な課題となり、そこで教師の力量
が必要とされた。それと同時に、この自
由保育に対する親の理解が不可欠であり、
そのための話す機会として母親の会や父
親の会を用いていたといえよう。自由保
育が理解され評価されるために親を啓蒙
する両親教育であると考えられる。家庭
に幼児教育に対する関心を持ってもら
うこと、幼児教育の必要性を教師と共

に話し合うことによって、親の園に対
する理解が深まり、それだけではなく、家
庭からの園児の情報を得ることによっ
て、より充実した保育生活が展開され
たと考える。それを契機にランバス幼
稚園では、母親の教養を高めるために
毎週水曜日に母親学校が行われ母親
の教育に努めてくことになった。そこ
では、教育、宗教、育児、音楽、美
術、社会学、経済学、自然科学など、
子どもの教育や母親の教養に必要な講
座が設けられた²³。教育的講演を聞
くだけでなく、時には、小児栄養に
ついて専門的に学び、料理講習を受け
る等といった機会や、前述で述べた
が、ナースリー・スクールで昼食を
作り幼児食の学びがあったことから、
母親の育児実践の研究の場でもあ
ったと考えられる。

また、父親の会や祖父母の会、ある
いは女中の会を設ける等、ランバス幼
稚園では、母親に限らず、家庭と幼
稚園が親しく交わり理解し合うこと
を大切な問題として捉えていた。子
どもの成長と共に、その子どもに関
わる大人も成長していくことが望ま
れていたのであろう。その他に児童
相談所も開設し、健康相談や教育相
談、家庭相談がなされていることか
ら、幼児の教育的、発達的研究機
関としての役割も担い、幼児教育が
一層専門的に進展していくことに
努めていたといえよう。

「南文庫」には、戦後、北陸学院の
幼稚園における母の会や父の会にお
いて、当時の教育方針や家庭教育に
ついて語った原稿ノート（「南信先
生研究ノート」）が残されており、
ランバス幼稚園の母親教育は、戦
後の南の保育においても連続して
いくものであったと考える。

(4) 園児の家庭階層

南信子がランバス女学院で学んで
いた1939（昭和14）年当時の財政
事情は『聖和保育史』によれば、保
育料については、一般の私立幼稚
園との比較では高額のものではな
く、保育料収入は経常費支出の半
額にも達しないほどであったが、不
足分は毎月ランバス女学院から補
助されていたとされる。ランバス
女学院では、ミッションからの援
助があったのである。園児からの
収入よりというよりは、ランバス
女学院自体の経営が安定していた
ことがうかがえる。

家庭について見ると、大阪の中心
街に接してい

たため商家が多く、また、教育家をはじめ知識階層に属する家庭も多かったとされる。後述で用いる「昭和13年度修了記念帖」における「僕が大キクナッタラ」「私が大キクナッタラ」の頁には、園児の言葉が載せられている。「オ父サンニ診察ノコトナラッテ看護婦ニナリマス」や「家主ニナッテケープルカーニノリマス」ということ、また家庭教育では女中の会を開いていたことから、この時代としては比較的進歩的な上流階層の家庭であったために、自由保育への理解を得やすかったのではなかろうかと考えられる。

当時の日本における幼稚園の5歳児就園率²⁴は、1939(昭和14)年では、8.1%である。戦時下においてであるが、その後も上昇し、1941(昭和16)年の就園率は、全国平均では10.0%となり、都道府県別でみると²⁵、上位から徳島県が30.5%、次いで岡山県の25.8%、その次にランバス女学院のある大阪府が20.7%となっている。東京都は、12.4%であった。戦時下ではあったが、当時、経済的に安定していた家庭階層が多かった大阪に位置したことは、ランバス女学院の幼稚園が信念を持ち続けていく上で意義は大きかったであろう。

IV. 保育の学び「昭和13年度修了証記念帖」より

「南文庫」にある記念帖類には、南信子がランバス女学院保育科を卒業、同専修研究科の入学年度(1939年度)のランバス幼稚園記念帖が残されている。本記念帖によると当時のランバス幼稚園園長は、これまでのM. クックが帰国したため、廣瀬浜子が担っていたことが記されている。また、主事はA. ピーヴィ、年長組担任が立花富、年少組が平野祐子、ナースリーが上野光、その他に栄養、(女医)等の職員構成であったことがこの記念帖から明らかである。本記念帖が専修研究科生にランバス幼稚園の卒業記念として贈呈されたものなのか、恩師立花富からもらったのかは明らかではないが、いずれにしても南信子においては、本記念帖は大切なものであり、南の保育実践の起点とでもいえるのではなかろうか。その内容を、明らかにすることを試みた。

1. 子どもたちの会話を中心とした保育

本記念帖の構成は、手作り一つひとつ細かい所まで手が加えてあり、当時貴重であった保育中の写真が貼られ、また手描きの色塗り作業等もなされていることから、限られた数を作成し限られた者の手に渡されたと考えられる。下記の写真は、本記念帖の表紙(右)と一頁目(左)である。良質で厚めの和紙に手書きされ謄写版印刷で作られている。



表紙をめくると、子どもたちの会話から始まっている。この一頁から保育内容を考察することができる。次のような子どもの会話が記されている。

昭和十三年度修了記念帖

ボクタチガ ワタクシガ 大人ニナッテイツ
カヨウチエンノトキノコト オモヒダシタラ
オカシネ 「小サイトキニハ アンナコト
シタリ アンナコトカンガヘタリ シタモノ
カナ」トイッテ。 ソノトキハキット エラ
サウニシテルヨ イバトルヤロウネ、ミン
ナ大人ノカホシテカラニ。

昭和十三、四緑組ノ会話ノ一部

ここには、子どもたちが大人になったときのことを考えた上で語り合ったエピソードが載せられている。子どもの声を取り上げ、記念帖の最初に載せるという点から、ランバス幼稚園では日々の保育において持たれた子どもたちの「会話」が、いかに大切にされていたか、ということがうかがえる。記念帖のために話し合った会話ではなく、子どもが主体的に話し合った微笑ましく希望に満ちた会話であると思われる。ランバス幼稚園では、この子ども主体の会話が常に生活の中心にあって、そこから子どもたちの成長発達につながる活動へ

と展開していたと想像することができよう。特に本記念帖においては、子どもの意欲的な会話によって充実した遊びへと発展していく保育内容を見ることができる。

2. ナースリー・スクールにおける人格教育

本記念帖の10頁目にはナースリー・スクール時代のエピソードが記されている。子どもと教師のやりとり「会話」から生まれた感慨深い出来事である。原文をそのまま引用すると次のようになる。(下線部は筆者による。□表記は判読不能文字。繰り返し符号のくの字点は／＼で表記した。)

ナースリースクールノトキ

オニハノビワノ木ガマイネン大キクナルヤウニアナタ方モ随分大キクナリマシタネ。今、目ヲツムツテズットイロ／＼ナ事ヲ思ヒダシテオリマス。ソレハ夏ノハジメ雨ノ日デシタ。ツライヤングルヲタタイテキタ誰カオ寺ノカネノヤウダトイヒダシマシタ。ソレカラコンナオ話ガ始マリマシタ。私ガオ寺ツテナニスルトコロ、「オガムトコロ」ドンナニシテオガムノ、皆サンハ手ヲ合セテオ経ノマネヲシマシタ。ナニヲオガムノ『死ンダ人ヲ』死ヌツテドウナルノ、満サンガ『オシマイヤ』視子サンガ『死ンダラオハカノ中ニ入レルノ』『ヤケテ灰ニナルノヨウチノオバアサンモサウダッタ』コレハ6月ニオバアサンヨナクシタ洋右サンノオ答ヘデシタ。ソウネ死ンデヤイタラ灰ニナルノヨデモ心ハヤケナイノ、チットモ。ソレカラ皆デカラダノホカニ心ノアルオ話ヲシマシタネ。一日オイタオテンキノタイヘンヨイ礼拝ノ時デシタ。オ心ツテドコニアルノ『ズット／＼オナカノ中ニ』ミタ事アル『ナイ、デモオ医者サンオナカキッタラデルヨ』アノネ心ハオ医者サンニモ唯ニモ見エナイノ。ソシテネカラダハヤケテ灰ニナルガ心ハチットモヤケマセン。カラダハ死ンデモ心ハイツマデモ／＼生キテイマス。『先生ボクノモ／＼。オカアサンノモ。』エエ、ソウデスヨ。『先生ソナラ鉄モ心カ、ヤケヘンデ』鉄デモヤケマ

スヨ。『ソナラガラスハ』ガラスモヤケテトケマス。デモ心ダケハドンナ火ニモヤケマセン。イツマデモ生キテイマス。皆サン心ガアツテウレシイデスネ。コノ心ヲ私ドモハ大切ニキレイニ立派ニ育てマセウ。

コノオ話ハコレデオシマヒデシタ。デモ私ハイツマデモコノ皆サンノオ話ヲワスレル事ガデキマセン。私ハコンナニ深いオ話ガ小サイアナタガタニスラ／＼ワカッテユクノガフシギデナリマセンデシタ。ホントニ私達イツマデモ／＼コノ時ノヤウニ見エナイモノヲハッキリト見聞エナイ声ヲハッキリトキク人ニナリマセウ。ソレハドンナニアナタ方ヲ幸福ニスルデセウ私ハアナタ方ノズン／＼大キクナッテキ□□マノノガタノシミデス。」

ここでは、ナースリー・スクールという3歳児のクラスにもかかわらず、「お寺って何するところ」という教師の問いかけから、人間の死と心について、子どもと教師が共感し合い深い会話へと発展していった様子が描き出されている。『』の言葉は子どもが発したもので、その前後は教師の声である。筆者は下線部の箇所に着目し、子どもと教師が共に思考し、話し合っていく過程が保育の質を高めていったことを考察したい。

夏のはじめのある雨の日の保育の中で、トライアングルを鳴らした音が「お寺の鐘のようだ」という子どもの声に対して教師が問いかけた。この会話は、教師が意図的に準備して始めているのではなく、子どもの興味関心に目を向けている教師の視点がうかがえる。もし仮に「お寺の鐘のようだ」という子どもの表現に対して、教師が「そうだね。」というような共感だけに留まっていたならば、その後の会話が深まり進展はしなかったであろう。教師が子どもの興味関心を受容し、それを保育として子どもの探究心へと展開させていく「お寺って何するところ」という問いかけが、人間の死についての会話へとつながっていったのである。子どもたちの中で、おばあさんが亡くなった経験のある子どもの身近な思いを汲み取りながら、「そうね、死んでやいたら、灰になるのよ、でも心はやけないの、ちっとも」という教師の声

により、一度その会話を終えている。

しかし、その子どもたちの興味を一度で閉ざしてしまうのではなく、一日おいた後に、今度はその会話から教師が意図的に人間の死、特にここでは「心」について、子どもと共に関心を向け考え合った情景がうかがえる。この「心」に関する会話は、礼拝の時間になされていることから、ランバス幼稚園の礼拝の時間では、子どもと共に話し合う場面があったことが明らかになったといえよう。礼拝といえば、讃美歌を歌い、聖書の話聞き祈るという形式的な内容が基本にあるが、ここでは、保育生活から生まれた会話による子どもたちの興味や関心が用いられ、人格教育的な内容へと展開していったと考えられる。ランバス幼稚園での礼拝は、人格教育の基盤を作る場として会話が活用されていたといえよう。

これは、筆者の推察であるが、前回の会話の後、子どもたちから教師に対して心は焼けないのは「なぜ」「どうして」というような疑問の声があったのではなかろうか。また、子ども同士の会話の中に「心」について話す様子が見られた、ということがあったのではなかろうか。子どもたちの「心」に対する興味や関心が見られ、「心」についての会話へと発展していった、あるいは、このような話題性から教師が意図的にテーマを設定し会話へと持ち込んだと考えられる。いずれにしても、幼い子どもたちと共にこのような尊い深い会話を展開していく教師の問いかけに注目したい。

教師の「お心ってどこにあるの」という問いかけから始まり、子どもたちの声に応答しながら、会話は深まり進んでいく。世界では争いがみられた戦時中だからこそ、人間の死については、子どもにとっても教師にとってもはかなく尊いことであっただろう。この会話は、子どもに問いかけると同時に教師自身への問いかけであったと考えたい。人間の心は永遠に存在する、その「心」を大切にするとということ、それは、一人ひとりが大切な人格、「心」を持ったかけがえのない存在であることを子どもと教師が共に感じ合ったと思われる。目には見えないが、一人ひとりに与えられている「心」を大切に育てるというところに、ランバス幼稚園におけるキリスト教保育の理念を見ることが出来る。人間形成の上で最も大切なことに

目を向け、子どもと教師が共感し合う保育がランバス幼稚園の幼児教育の重要な使命とされていたところであり、南信子が学んだものであると考える。このような信念を持ち続けて南信子はキリスト教保育の歩みを始めていったと考えられる。

3. 一人ひとりの思いが大切にされた自由保育

記念帖には、子どもたちが自由作業の中で作ったものを用いて遊ぶ様子が描かれている。自由作業で、一人ひとりが懸命に作っている様子や作ったものを皆の前で見せている姿の写真も掲載されていることから、ランバス女学院による自由保育は、子ども一人ひとりの思いが実現できる過程を重んじそのための準備がなされ、作ったものを用いて他の友だちと遊ぶという創造性発展性があるものであったと考える。記念帖によると、下記の「時計」と題した頁には、一人の子どもが作った六角時計を用いて遊ぶ様子がうかがえる。

時計

トモチャンノツクッタ六角時計デミンナガヨロコンデ針ヲウゴカシナガライッタコト・イマハアサ。

- ・九時ニヨウチエンガハジマル。
- ・十時オチノヲノムジカン。
- ・十一時オネムリ。
- ・十二時オウチヘカヘル。
- ・一時オヒルゴハンガスダゴロ。
- ・二時ソトデアソソデキル。
- ・三時ハオヤツ(オイシイナ)。
- ・四時ニオソウジシマス。
- ・五時ハオユウハン。
- ・六時ニオフロニハイル。
- ・七時モウネル人トマダアソブ人。
- ・八時ミンナネドコニハイル。・ヨル
- ・九時デスネテキマス。
- ・十時グウノネテキマス。
- ・十一時ハヨナカデマックラ。
- ・十二時大人ノネルジカン。
- ・一時 チン。
- ・二時 チンノ。
- ・三時 チンノノ。
- ・四時ミンナネテキル。

- ・五時大人ガオキル。
- ・六時コドモガオキテカホヲアラツタリラヂオタイソウ。
- ・七時サンポニデカケル。
- ・八時アサゴハン。「昭和十三年六月」

これによれば、時計に興味をもった子どもが自由作業において、六角時計を作ったことがわかる。「六角時計」といえば、この当時の子どもたちにとっては、高価で馴染み深いものではなかったであろうが、商家や進歩的で上流家庭階層の子どもが多いとされたランバス女学院であったため、そのような思いを抱いた子どもがいたのであろう。子どもの興味に重点を置いたランバス女学院での保育内容であったといえよう。

また、作った六角時計を用いて、他の子どもたちと会話による遊びの展開が描き出されている。この経験によって、子どもたちが時計の概念を主体的に学んでいくという自由保育の遊びにおける教育的発展性が見えてくる。また、「一時チン」「二時チンチン」といったように、この遊びには、言葉の音やリズムを楽しみながら数を理解するという要素が含まれており、ここでは、教師が子どもに教えこむという形式ではなく、子どもが主体的な経験を通して学ぶというランバス女学院の保育理念が表れている。

この遊びでは、「トモチャンノツクッタ六角時計デミンナガヨロコンデ針ヲウゴカシナガライツタコト」というように、友だちがつくった六角時計の針を動かし遊びながら園児が発した言葉、会話による遊びの展開がある。この一人ひとりの思いが大切にされた自由保育においても会話が中心にあるのは、ランバス女学院の特徴であり重視していたといえよう。

この保育を担当していたのは、記念帖に担任が記されていることから、立花富であるということ は明らかである。自由作業によって作りあげた作品は、教師の意図通りに作り上げられていったものではなく、あくまでも子どもが主体であるので、出来栄は決してよいものではなかったと思われる。しかし、ランバス女学院では、自由作業が盛り上がりを見せたのである。1928(昭和3)年4月から自由作業が定着する経緯について『聖和保

育史』の立花富の記述によれば、「自由作業といっても教師も子どもも不慣れなので、最初は毎日三・四種類の在来の手技材料(積木、紙類、粘土、画等)を紹介し、子どもの各自が好きな材料を選び、それで思い思いに何かを作るとい程度のことであった。しかし、やがて子どものほうから、“こんなことがしたい”、“こんな材料がほしい”という目的のある要求が出されるようになった。その最初のもので、男児はボート作りで木工関係の材料の要求(この年度の終了園児の記念品に木工台を寄付してもらい、教師たちは木工指導を受けた)、女児はままごとのエプロン作りで布切れだった²⁶⁾と述べている。

その後、ランバス女学院では、自由保育によって子どもたちが伸びていく姿を目の当たりにし、真の保育として進歩していったのである。それが本記念帖に見られる自由保育の姿であるといえよう。しかし、親たちにとっては、子どもの自由な作品や絵等の意義を理解するのは困難だったとされる。子ども自らの要求を重んじた自由作業については親をはじめ専門家たちからの批判も受けていたことが『聖和保育史』に記されており²⁷⁾、当時は、教育意図を表し保育に取り組んでいた他の幼稚園では美しく完成された製作品を持ち帰っていた。自由作業で作ったものの出来栄が全て良くなかったのではなく、一人ひとりの能力に応じた自由作業の展開を教師が上から押し付けるのではなく側面から励ましていく過程によって、子どもの思いが込められたものへと作りあげられていったのである。そこには、多様な素材の準備、教師の柔軟な対応を要したであろう。

この自由作業によって子ども一人ひとりの要求が受け入れられ満たされるという充実感と自分の思いが大切にされ作り上げていく過程で創造力が発揮されたことによる達成感が、一人ひとりの子どもにとって大きな喜びを生んでいったのである。その喜びは子どもたちの驚くべき成長へと結びつき、この自由作業を通した自由保育の展開がランバス女学院の特徴として認められ、さらに保育の信念として継続されていったのであろう。

その子どもたちの成長の支えとして、子ども一人ひとりの発達の理解と子どもの「したい」という要求を満たす遊びの環境準備、さらに遊びが発

展するための助言など、充実感や達成感のための手助けとして教師の大きな役割が存在したと筆者は考える。子どもたち一人ひとりの思いが込められた作品によって遊びが発展し、子どもたちの成長へとつながったことは、親にとって自由保育を受容する手がかりとなったといえよう。ここでいう自由保育は、ただ単に子どものわがままが受け入れられるのとは異なり、一人ひとりの子どもが人格をもった大切な存在であるというランバス女学院における子どもの人格を尊重したキリスト教保育の理念であろう。

本記念帖から、ランバス女学院における自由保育は、子どもたち一人ひとりの能力に応じた教師の助言等によって伸ばしていくというものであったと考える。そこでは教師の指導は側面から行い、子ども自らが考え、活動を展開していった。ランバス女学院での保育には、子どもたち一人ひとりの発達段階を把握した教師による子どもの思いの受容と、子どもの要求に必要な遊びの準備が求められ、また、日々子どもの様子を冷静に観察し判断する能力が備わった教師として立花富の姿が見られたのであろう。これは、南信子にとって望ましい教師像として捉えられていったといえよう。

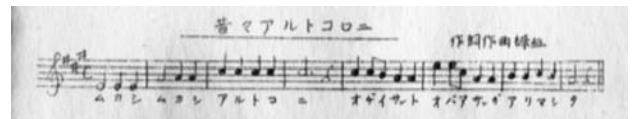
4. 子どもたちの文化的創造的な遊びの展開

本記念帖では、子どもが創作した物語、作詞作曲した歌なども掲載されていることから、いかに子どもが自発的に保育に参加し、教師と共に保育を創り上げていたかについて考えたい。記念帖に次の子どもたちの創作話が載せられていた。

これは、「財布の中の赤ちゃん」というタイトルのお話である。本記念帖の卒園児が年少組(4歳児)時代に作ったものであろう。二人(の内に赤ちゃんのお父さんがいる)が泳いでいたら、人間の赤ちゃんが入っている財布をカニが持って連れて行ったため、あわてて、お父さんがお家に帰りお母さんに伝え海岸に来てみると、タコとカニが赤ちゃんのおもりをしていた。赤ちゃんの両親がお礼と言ってつれて帰ろうとすると、タコがタコのお母さんに赤ちゃんを見せてあげたいと言って財布ごと赤ちゃんを貸してあげることになり、その後返してもらったというストーリーの展開である。

このお話は、筆者が考察するには、子ども自身が考え作っていった自発的なものであり、「財布の中に赤ちゃん」がいるという表現には、幼児独特の想像性と創造性に満ちたものがある。また、創作話から想像力を膨らませ、絵で表現した過程では、遊びがより発展的なものとなったといえよう。

創作話の他、下記の写真にあるように、子どもたちによる作詞作曲の歌が掲載されていることから、ランバス幼稚園の日々の保育では、創造的かつ文化的な遊びに親しんでいたとうかがえる。



1. 昔々アルトコロニ オヂイサントオバアサン ガアリマシタ。
 2. オバアサンハ川ヘセントクニ バナナガナガ レテキマシタ。
 3. オバアサンハ家ニ モツテカヘツテ ヒトリデミンナ喰ベマシタ。
 4. ソコヘオヂイサンガヤツテキテ バナナノ皮ヲフミマシタ。
 5. オヂイサンハドッコイショト スベリマシタ ソシタラケガシテチガデマシタ。
 6. オバアサンハビックリシテ ホータイモツテキテ イソイデイソイデマキマシタ。
- 「ヨハリ」

これは、作詞作曲緑組²⁸ということから子ども



たちが年長時につくったものである。「昔々あるところに」という始まりから、日本の昔話や童話等に親しんでいた子どもたちの発想で作られた物語歌といえよう。「ももたろう」のお話を子どもたちなりに変化させながら構成していったとも考えられる。内容は子どもたちの生活に身近な話題から始まり、「どっこいしょと すべりました」や「びっくりして ほーたいもってきて」「いそいでいそいで」という表現には、面白味があり、子どものユーモア性を大切にした教師の配慮がうかがえる。作詞作曲録組という根拠は、子どもたち自ら紡ぎ出していった作品として残されたということではなかろうか。これらの内容からランバス幼稚園の保育では、子どもが主体的になり、文化的創造的な遊びが展開されていたといえよう。

また、本記念帖には、「キイグミノピック」や「ミドリグミニッキ」と題した年少組・年長組時代のエピソードや、遠足、クリスマス、収穫感謝祭などの行事に関する写真や教師からのコメントが記されているが、その中でも子どもたちの会話が取り上げられている。保育における学習の主体を教師にではなく、いかに子どもにおいていたかという子どもの生活経験を中心としたランバス幼稚園の保育が見えてくる。

本記念帖より、南信子がランバス女学院時代に立花富を中心としたランバス幼稚園の教師から学んだ保育は、子どもの自発的で創造的で活動的な遊びであり、会話の活用があったといえよう。会話については、南信子が戦後の保育において子どもの「協議性、話し合い²⁹⁾」を重要視していることからその源流とみることができる。

V. 南信子の保育思想の起点

本稿では、南信子の保育の歩みをランバス女学院で学んだランバス幼稚園を概観し、その保育内容を中心に考察した。ランバス女学院において、自由保育といわれる保育形態を立花富から実践的に学んだ昭和戦前期、ここに南信子の保育思想の起点がある。それは、子どもの生活を重視した自由保育を中心に据え、子どもの主体的な会話を基盤とした創造的文化的な活動を目指すものであった。そして、礼拝においては、神の教えをただ形式的に子どもに伝えるだけでなく、子ども自身

の生活経験の中から自然に生まれてくるような思いや願いを神への応答として大事にされていたといえる。また、ナースリー・スクールによる人格形成を目指した進歩的な教育活動の学びは、戦後の歩みにおいて、南信子の保育思想を裏付けていったといえよう。

VI. おわりに

ランバス女学院で南信子が学んだ、自由作業を中心とし子どもを主体とした自由な保育の姿は、「南文庫」の史料にある「ランバス幼稚園昭和十三年度修了記念帖」に描かれているが、南信子の保育思想形成過程の解明には、さらにその保育の方法を具体化することが今後の課題となった。1939(昭和14)年、南信子がランバス女学院研究科時代の手稿ノート「保育案 昭和拾四年 南信子」は、4月から3月までの年間カリキュラムが記されており、会話と自由作業が中心にある保育案であるという特徴が見られるため、南信子の保育の源流、保育実践形態の形成の内実を明らかにする上で重要な手がかりとなるであろう。

<注>

¹ 近代日本の幼稚園における保育実践の特質についての研究として、戦前期までの保育実践の立場からの保育内容や方法の変革に視点を置いた小山みずえ『近代日本幼稚園教育実践史の研究』(学術出版会、2012年)では、主に日本の公立幼稚園における保育実践の展開に焦点を当てその特質についての検討が行われており、キリスト教主義幼稚園における保育状況等について一切取上げられていないところには課題がある。なかでも進歩主義教育の受容をめぐることは、キリスト教主義幼稚園の改革動向が日本の公立幼稚園やキリスト教主義以外の私立幼稚園にどのような影響を与えたのかについては具体的に言及されていない。

² 畠山祥正「南信子 そのキリスト教保育論」(『2012年度北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要』第5号、2013年3月)は、「南信子・輪島道友による対談 あなたがたの教師はキリスト一人である - キリスト教保育の理念を求めて - 」(南信子編『花の蕾ひらくとき 北陸学院幼稚園の物語』2000年3月、390 - 404頁)の後半部分「キリスト教保育の哲学」で語られている南信子のキリスト教保育論について検討している。南信子にとって、

礼拝は保育(幼児の生活)の一部である。礼拝はキリスト教保育の中心でありながら、生活に溶け込むべきものであり、保育の営みすべてに、礼拝の精神が浸透しているべきであると言及している。南信子の保育の中核には、その「礼拝」があると筆者は着目する。

³ 南信子の使用していた蔵書や手稿ノート等は、「南文庫」として現在も保管されている。「南文庫」の調査(畠山祥正・熊田凡子『『南文庫』の概要とその利用について』(『2013年度北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要』第6号、2014年3月))より、南信子の戦前戦後における南と南を取り巻く人々の関係や、南の保育実践や保育理論の展開に関わる南自身の保育思想形成を探る上できわめて貴重な史料が含まれていることが明らかとなった。

⁴ 聖和八十年史編集委員会編『聖和八十年史』聖和女子短期大学、1961年、152頁。

⁵ 聖和幼稚園100年史委員会編『聖和幼稚園100年史』聖和大学、1991年、33頁。

⁶ 同上、32頁。

⁷ 同上、32頁。

⁸ ランバス女学院保育専修部とその前身の広島女学校保母養成科について

1895(明治28)年広島に創設されて以来、修業年限二か年の保母養成機関として保母を送り出してきたが、1908(明治41)年には広島女学校保母師範科と改称した。アメリカで進歩主義の幼児教育を学んだ甲賀ふじは、創立以来、ゲーンズ(Nammie B.Gaines, 1860~1932)、クック(M. M. Cook, 1870~1958)とともに、新しい保育理論に基づいた保母養成を行った。大正15年、大阪にランバス女学院が創設させるように当たり、広島女学校保母師範科は発展的に解消され、ランバス女学院保育専修部となって新発足することとなった。(『聖和八十年史』より要約。) 甲賀ふじ(1856~1937)は、1887(明治20)年、4年のアメリカ留学生生活を終えて1891(明治24)年1月から神戸の頌栄幼稚園で働くが、同年9月には幼稚園が開設される広島で新たな歩みを始めている。頌栄幼稚園は、A. L. ハウ(Annie Lyon Howe, 1852~1943)によってフレーベルの幼児教育に関する根本思想の把握とその実践がなされた園である。甲賀ふじは、本質的理解がなされた真のフレーベル主義の教育を頌栄幼稚園で学んでいたと考える。

⁹ 津守真、久保いと、本田和子著『幼稚園の歴史』によれば、フレーベル主義教育とは、フレーベル主義の教育理論と実際とを真に具現した幼稚園教育のことを表す。

フレーベル幼稚園は三つの特徴をもっている。第一は、フレーベルの抱いていた児童観、「いざや、われらをして子らとともに生かしめよ」というフレーベルの愛唱の句にあらわれているような児童に対する愛着の気持と、児童の生活をどこまでも尊重する考え方である。第二は、フレーベルの考案した教育用具、恩物の使用であり、第三はいわば上の両者を結びつけるものとしてのフレーベルの教育理論である。宇宙、生命に関するフレーベルの哲学は抽象的であり、象徴的なものであるが、彼は自己の直観による宇宙観を教育用具を通して子どもに伝え、子ども自身に直観させようとしたのである。フレーベル主義の幼稚園では、幼稚園の創始者であるフレーベルの構想をそのままひきついで実行するべきであったが、フレーベルの考案した恩物があまりにも整然と体系づけられ、その一つ一つに深遠な意味が附されたため、ただひとつの形態として受けとられ、曲げるべからざる法則とみなされたのである。その結果、幼児の創造性を重視し、信頼し、尊重したフレーベルの真の精神が伝えられず、幼児の自発性を無視し、幼児を型にはめることを意図したフレーベル式保育という、ただ彼の残した形骸のみがそのまま伝えられていったのである。(津守真、久保いと、本田和子著『幼稚園の歴史』恒星社厚生閣、1959年、151頁、233頁より引用要約。) 本文で用いる、フレーベル主義教育とは、形骸化されたフレーベル式という型の中に幼児をはめこもうという意味ではない。

¹⁰ M. クックが赴任(1904(明治37)年)後のランバス幼稚園は、『聖和幼稚園100年史』の「聖和保育の目指すもの」によれば、「初期の時代の保育は、幼稚園(Kindergarten)の創設者F. フレーベルの教えに忠実に踏襲するものであったが、大阪に移転して、ランバス女学院附属幼稚園となった頃から、M. クック先生の指導で、当時アメリカ幼児教育の主流であった進歩主義(progressivism)にもとづく自由保育の形態が取り入れられた。その保育理念は、その理論的根拠をJ. デューイやW. キルパトリックの経験主義哲学、S. ホールの機能主義心理学、A. ゲゼルの成熟理論にもとめ、学習の主体を教師にではなく、子どもに置く、いわゆる児童中心主義で、その後の聖和保育の根幹をなすものとなった。」と記されている。

また、『聖和保育史』(58頁~59頁)によれば、「M. クックは、当時わが国の幼稚園教育に大きな力をもっていたフレーベルの恩物使用に対して、フレーベルの幼児教育への崇高な理念と深い洞察に影響を受けつつも、それを刺激として新しい進歩主義的教育理念を積極的に教育の

方法に採用しようとする意欲をみせた。クックは1991(明治44)年の休暇帰国の際、コロンビア大学において新教育をデューイらから学んだが、翌年広島に帰任するや早速それを実際に応用した。従来なされていたような教師の指導による手工(技)から全面的に幼児自身による自由な製作に切りかえたのである。さらに、これまでの保育時間割を廃止して自由作業、自由遊びに重点をおいた。」とある。

¹¹ 文部省『幼稚園教育百年史』1979年、ひかりのくに、204頁～205頁を参照。

¹² 進歩主義教育とは、20世紀初頭に、読み書き数えるなどの訓練や伝統的教科内容の一方的注入を計る旧来の教育を批判し、子どもの興味や自発的活動を尊重する立場から学校教育の改革を求めて展開された、アメリカにおける教育改革運動・実践とそれを支えた理念の総称をさす。進歩主義教育は、19世紀末から20世紀前半にかけて欧米諸国を中心に広がった新教育運動の系譜をくむもので、アメリカにおける中心人物であったパーカーやデューイ(DEWEY, J.)らの実践や理論が源流となっている。(『聖和幼稚園100年史』文末脚注参照、『現代教育学事典』p.453、酒井博世より要約。)

¹³ 前掲『聖和幼稚園100年史』34頁。

¹⁴ P.S. ヒル(Patty Smith Hill, 1868～1946)は、アメリカにおける進歩主義幼稚園運動に貢献した人、ケンタッキー州ルイビルに生まれる。1889年にルイビル幼稚園教員養成学校を卒業した後、ルイビルのモデル幼稚園の責任者、ルイビル幼稚園教員養成学校の校長とした。この時期に、フレーベル主義幼稚園に批判的であったブライアン(A. BRAYAN)と協力して、恩物に頼らない新しい幼稚園教育の内容・方法を実験的に研究した。

1905年からコロンビア大学のティーチャーズ・カレッジで幼稚園教育に携わり、新教育の理論的指導者であったデューイの助言のもとに、新しい幼稚園の原理と実践の研究を進め、1923年「附属幼稚園と第一学年におけるコンダクト・カリキュラム」として発表し、内外に広く影響を与えた。彼女の考案した大型積木は、ヒルの積木として知られ、生理学や児童研究の成果を背景とした。子どもの自由で創造的な共同活動を重視し、積木の優れた教育効果を生かしたものである。(『聖和幼稚園100年史』40頁、文末脚注を参照、『幼児保育学辞典』、明治図書、P559より要約。)

¹⁵ 前掲『聖和幼稚園100年史』35頁。

¹⁶ 同上、35頁を参照。

¹⁷ 同上、35頁。

¹⁸ ランバス幼稚園ナースリー・スクールについては前掲『聖和幼稚園100年史』36頁、前掲『聖和保育史』156頁～158頁、キリスト教保育連盟百年史編纂委員会編『日本キリスト教保育百年史』キリスト教保育連盟、1986年、204頁～207頁を参照。

¹⁹ 聖和保育史刊行委員会編『聖和保育史』聖和大学、1985年、157頁を参照。

²⁰ 同上、157頁。

²¹ ランバス幼稚園の教師会については、前掲『聖和幼稚園100年史』37頁、前掲『聖和保育史』157頁～158頁を参照。

²² 前掲『聖和保育史』153頁～154頁を参照。

²³ 前掲『聖和八十年史』152頁を参照。

²⁴ 日本の幼稚園における就園率については、前掲『幼稚園教育百年史』820頁～821頁、「年度別幼稚園数、幼児数、教員数及び5才児就園率」を参照。

²⁵ 日本の幼稚園における就園率、都道府県別については、同上『幼稚園教育百年史』217頁、「幼稚園の設置状況(昭和17年度)」と参照。

²⁶ 前掲『聖和保育史』152頁。

²⁷ 『聖和保育史』によれば、自由保育に対して、陶冶を重んずる立場からは批判の声が聞かれ、子どもの製作についても、親の方から旧来の手技帳の製作を要望して教師を困惑させたりしたことが記されている。「自由作業では、殊に低学年の場合、父兄にプレゼント作品を理解してもらうことは一仕事であった。また、親たちにとって幼児の自由な絵や作品の意義をよく理解して受け止めてもらうことも困難の一つであった。他園のように美しく完成された絵や作品が家に持ちかえられることは少なかったからである。この自由作業については、親たちからばかりでなく内外専門家たちからの批判もあったが、とにかくこれがランバス幼稚園の特徴として認められていくようになる。」(『聖和保育史』152頁～154頁より引用要約。)

²⁸ ランバス幼稚園記念帖によれば、年長児クラスを緑組、年少児クラスを黄組、また、それとは別に2～3歳児のナースリー・スクールが設けられていたことがわかる。

²⁹ 「南文庫」の南自身の手稿ノート28番(「南信研究ノート28」(1984年))では、保育の構成要素として、話し合いの教育効果が記されている。